ネブラスカ襷掛け縦断

2007 年 4 月 6 日～8 日

ちょっとだけ暖かくなり、これは、いよいよドライブシーズンと意気込んでいたところ、突然先週から寒さがぶり返し、予報では、ネブラスカの西は雪の予想が出ていました。雪道ドライブでは随分怖い思いをしましたので、ネブラスカの西はやめて、カンザスに行こうかとコースをいろいろ見ていたのですが、前日になり、ネブラスカの西よりもカンザスの方がどうも天気が崩れそうということで､無理をしてネブラスカの西、とりわけ今回の目的は、なんとしてでも見ておかなくてはいけないというサンドヒルのドライブ、に挑戦することにしました。コースは、第一日目は、ただひたすら西にむかってドライブするのですが、走るだけでは意味がないと、今回は時間の余裕をとり、道々の博物館に立ち寄ることにしました。ネブラスカの西には、決して大きな町ではないのですが、西部開拓に重要な役割、とりわけ、ゴールドラッシュではたくさんの幌馬車が通ったトレイルがありますので、その宿場として栄えたと思われる町がたくさんあります。こうした町には、当時の面影をのこした博物館がありますので、これらを尋ねながら、西へのドライブとしましまた。

第一日目

この日の最初の博物館は、Hastings にある博物館です。Hastings は、Grand Lsland の南にある町、やや、Grand Island に押された感じがしますが、歴史てきにはこちらのほうが重要のようです。ここには、大学もあるし、町自体は非常に落ち着いた感じのする町でした。それほど、宣伝がされているわけではないし、また、町の博物館ですから、あまり期待はしなかったのですが、中に入ってびっくり。まず、館の職員が、今日の訪問の目的は何でしょうかと質問してくる｡｢インディアンの歴史に興味があるのですが｡｣というと､｢ここの歴史については、専門の教室があるからそこに行きなさい｣と紹介してくれた。が、途中、展示されているものを見てびっくり。一階には、ネブラスカを中心にして、アメリカ大陸で見かける動物の剥製が展示されている。が、その数、種類が豊富なこと。バッファローに始まり、グリズビーや白熊などの熊の類、予想以上のお大きさのヘラジカから、マウンテンゴート、狐、ヤマアラシ、プレーリードッグなどなど、ありとあらゆる動物、それにアメリカ大陸に見られる鳥の類、そのほか、貝の標本、石、宝石の標本、化石など

など、とにかく、展示物の豊富なこと。勿論、アメリカの博物館では、どこでもおなじみの Old classic Cart も展示されている。地下にその展示場があった。有名に Wells Fargo などの Stage Coach、1910 年代のフォードなど、よくもこれだけ集めたものだと思わず噴出してしまうほど。この博物館の一階には、プラネタリウムもあり、天体関係の展示もかなり充実している。アメリカ各地で収集された隕石の展示コーナーはなかなか迫力がある。隕石の生まれ故郷から、隕石と地球の石との違いが説明してあった。隕石の中のイリジウムの含有量が地球のものより高いのだそうだ。アメリカでは発行した貨幣の展示室には、インディアンたちが使っていた貨幣が収集されていた。ビーズや骨、そして、貝殻など、「Lewis と Clark の探検隊」のなかで出てきた馴染みのあるもの。ここまで来ると、まさしく、至れり尽くせり。念願のインディアンの情報については、満足できるほどではなかったが、それでも、この当たりに住んでいたというインディアンの酋長たちの肖像画や彼らの生活様式などの展示がなされていて、とてもよい勉強になった。

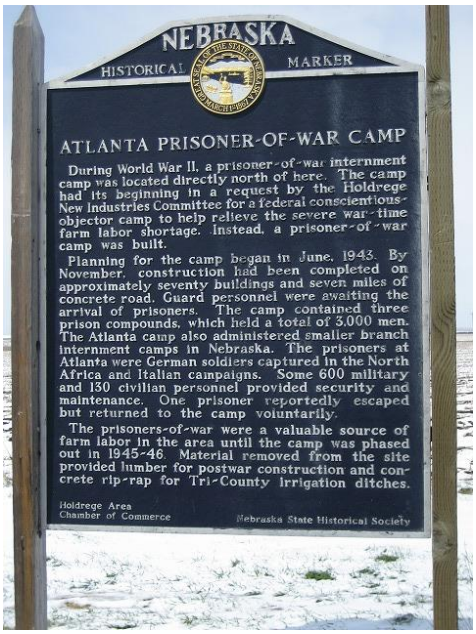
この博物館のなかを見学していたさなか、この日の見学者は、広い博物館のなか、数人程度。その中にどこかで見かけたような顔の日本人のお母さんが居たが、どこで会っていたのか思い出せず挨拶をせず、この博物館をあとにした。

Hordrege の博物館　「Nebraska Prairie Museum」

Hastings から、さらに西に進む。60miles で Hordrege という町に着く。途中、Minden という町には、有名な Pioneer Village という、ここも実に中味の濃い展示をしている博物館があるが、ここは、以前に何度も訪れたことがあるので、今回はパス。

Holderege の町にはいり、街道からすこし離れたところにこの博物館があるはずであるが、地図を調べたがよくわからず、一か八かで場所探しをした。アメリカの博物館など、日本と違い案内板などは滅多にない。あるとしても道路からの入り口に、いかにも、「ここが、目的のところです。」程度の表示が出ている程度。ようは、こうしたところに見学に来る人は、事前によく調査をして、ある程度の予備知識を持ってきてほしいというところか。だから、場所など知っていて当たり前という感じ。そして、展示場の入り口には親切な係官がいて、「今日の訪問の目的は？」と尋ねてくる。通りすがりで、ちょっと立ちよっただけなどというのは、すこし考えが甘いようだ。というわけで、ここでも気軽に立ち寄るつも

りでいたため、場所を探すのに苦労をした。それらしきところまで来ているのだが、なかなか見つからない。道を尋ねようにも、どこにも人影が見つからず。仕方なく、半分諦め、返りかけたら、底にスーパーがあった。「そうだ。ここなら誰か居るだろう。」と駐車場は入ったら、運良く若いお嬢さんが二人ほど車のまわりで買い物荷物を積んでいる。二人連れなら大丈夫だろうと、博物館のありかを訪ねる。新設に、この先、すこしいけば、バッファローの目印があるという。横にいた年配のかたが、1/4 マイルくらいだと教えてくれた。これでなんとか目的の博物館にたどり着く。ここにも例によりご年配の案内係りの人がいて、人懐っこくあれこれ説明してくれた。自然の博物館というより、パイオニアの生活の名残を展示している感じ。それにしてもここでもその収集の多さにはびっくり。子供の人形、家庭のなかの婦人の仕事の様子、そして、ドレスの作り方から始まり、食器、室内装飾品、それに懐かしい、足踏みのミシン。奥のほうに行くと、アトランタ捕虜収容所の展示がしてあった。「えっ。なぜここがアトランタなの」と不思議に思ったが、ここでは詳しい説明を読まず、なぞのまま見学を終わったが。あとで、ここから、McCook に行く途中に、Historic Maker があり、そこに、ここは、「アトランタ収容所」のあったところという説明があつた。この場所がアトランタというところであるらしい。ここの収容所には、アフリカ戦線で捕虜になったドイツ兵、そして、イタリアの兵隊が収容されていたらしい。この大平原のなかの収容所から彼らは脱走したのだが、どこまで行けども、人家のないこの場所。結局逃げ切れず、周辺の住民の助けでまた収容所まで送り届けられたというはなし。助けられて、また収容所に戻るあたり、まさしく大陸のアメリカならではの話だ。ここにも、インディアンのクラフトがたくさん展示されていた。鏃といい、石斧といい、彼らがこうしたものを使っていたのは、つい、数百年前のはなし。ここには、想像を絶するような時代の格差が存在している。この博物館、よくよく調べてみたら、このアトランタの捕虜収容所の展示ということで、非常に価値のある博物館とのことであった。やはり、もうすこし事前に勉強していく必要がある。



というようなわけで、この博物館、界隈の学校の見学が相当あるようである。アメリカが

第二次大戦でなにをしてきたのかを後世にのこす重要な証拠として大切にされているのだろう。

McCook の　「Museum of the High Plains　」

McCool の博物館は、Hordrege の博物館とおなじような感じであったが、規模はいまいち。それでも、たった一人の訪問者の私のために、わざわざ、二階の特別の展示室まで案内してくれて、これには、少々恐縮。ここには、鉄道模型の展示がしてあり、アメリカ大陸横断鉄道の歴史を紹介していた。Holdrege の博物館と同様、ここの目玉もドイツ兵の捕虜収容所の展示であった。とくに目新しさは感じなかったが、この辺りの町にはでこにもこうした博物館が整備されている。勿論、シカゴやニューヨークといった大都市にも有名な博物館はあるが、展示されているものはみな、現代風な感覚で興味を持たれるようなものが多く、世界的にも貴重で高価なものが収集されているようであるが、ローカルの博物館は決して立派とはいえないが、入場料は殆どがドネーション、すなわち、寄付程度でよいし、展示されているものも、生活に密着した、アメリカの風土が生んだ文化を紹介しているものが殆どで、ふと立ち寄り、アメリカの歴史を気安く学ぶことができるのはよそ者には本当にありがたいことである。

おいおい、雪が本格的に降り出したぜ。

McCook でアメリカの旧い文化に接し、この辺りの歴史を思い浮かべながら、ハイウェイ 6 号に入りコロラドに向かう。この辺りから、標高がだんだん高くなってゆく。それに従い土地も痩せてきて、農耕が少なくなり、牧場がちらほらと見えてくる。アメリカには、まだ開拓されていない土地がふんだんに余っているということを感じることができる。どこの州の入り口にも、ウェルカムの看板が建っていて、これをみると何もない大平原の中でも、自分のいるところを確認することができる。一端、コロラドに入り、コロラドの風景を楽しみながら、北に向かうつもりでいたが、どうもこの頃から天気が怪しくなってきた。西の空はどんよりと曇り、いかにも雪が落ちてきている様子だ。やがて、Starling と言う街から、138 号線へ。と、すぐに、おッ。踏み切り。貨物列車様のお通り、と来た。この辺りの貨物列車の長さは並大抵ではない。100 輌は優に越えているので、通過するには数分掛かることもある。とにかく、ここ

は腹を決めるしかない。天候が悪化してきて雪が心配でも、これだけはなんとも仕様がないと諦める。やがて、列車が通過すると雪も本格化してきた。このままでは、またたいへんなことになると心配で、気が気ではなかったが、よそうでは、ここから北に行くに従い、雪は少なくなっているはずである。目的の Sidney まではまだ少しある。雪が降ってスリップしそうなときは、誰かの車の後につくに限るが、自分の後ろを走っているピックアップのトラックもなかなな私を追い抜いてゆかない。仕方なく、時速 50 マイルで慎重に運転することにした。コロラドからネブラスカに再び入ることになっているが、この辺り、ネブラスカでもっとも標高の高いところ。雪はちらほらではあるが、なかなかやみそうにない。そんなドライブで漸く、無事、ホテルに到着。とにかく、明日の天気が心配だ。北に行くに従い、天気は回復するといってはいるが、ここがネブラスカであるのにもかかわらず、天気予報はコロラドの話しばかり。どうも、この寒波でまた、コロラドに大雪が降っているらしい。

二日目

すこしは予想してきたのですが、この日の朝は、なんと雪景色。これにはすこしびくつきました。とにかく、旅先での雪にあまりいい思いではありませんから。六時におきて、いつものように七時にはホテルをでる予定でしたが、一時の時差もあることだしということで、この日の朝は久しぶりにゆっくりということにしました。

Sidney からの I-80 がのろのろ運転。雪もたいしたことではないが、道路はどうも危ない。ということで、西に行くつもりでいたが、できるだけ雪がすくなかったという北に向かうことにした。385 は、Sidney から Bridgefort に伸びているハイウェイ。ここも少々雪が積もっていたが、車は普通どおり走っている。しばらくしたら、道路わきに僅かの雪がある程度でなんとか走れる状態。しかし、ここで事故を起こしてはもともこもない。慎重に慎重に。先を急ぐ車には道を譲り、マイペースで走る。時間的にも四角形の三辺を省略した形であるから、予定より随分とはやくなっている。こうして、Bridgefort に着く。目的の Corthouse and Jail Rock はここから 10miles ほど、逆戻

りすることになるが、途中、何の気なしに見た遠くの景色のなかに、それこそ、威厳をもってそびえているという表現がぴったりの独立岩が見えた。ひょっとして、あれが目的の Courthouse & Jail Rock かもしれない。となるとこれは、是非、見なくては、と 88 号を南に下る。しばらくして、先ほど見た岩がまさしく、ここを収めているのは私だといわんばかりの威容をもって、眼前に現れた。なんと、想像以上のすばらしさ。当初は、1 キロほど離れたハイウェイから眺めていたが、せっかくのシーニックドライブと銘打たれたこのコースに入ったのだから、すこしここをドライブしようと思い、車を進めていたらなんと、先ほどの Courthouse & Jail Rock への入り口とある。雪をかすかに被った道であったが、ゆっくり進めば何とかなると、腹を決めてこれに挑戦。半マイルも走っただろうか、まさしく、正真正銘の Courthouse & Jail Rock の足元に立つことができた。これには感激。チムニーロックほどの異様さがないためか、今ひとつ知られていないが、その姿の威容さでは、これに勝るとも劣らないさまである。オレゴントレイルばかりではなく、モルモントレイル、ポニーエクスプレスもこの岩を目印にネブラスカを通過したそうだ。

カーヘンジ

この岩のすばらしさを堪能し、つぎの目的し、Alliance に向かう。ここのお目当ては、イギリスの天文学の伝説にのこるストーンヘンジをもじったカーヘンジという造詣物。確かに、現在のカー社会を風刺的に造ったものとしてみると、とてもユニークであるが、これが、普通の人に受けるかどうかは疑問。というわけで、最近ではすこし廃れ気味なのか、それとも、回りに緑の草が生い茂り、温かい太陽の季節ともなれば、このユニークな造詣を沢山の人が見に来るようになるのかも知れないが、冬の今は、シーズンオフということで、周りは閑散として、名所というにはすこし物足りなさを感じた。それでも、この芸術家、まだまだアイディアが豊富で、今度は別のおかに車を大地に突き刺したような造形物を次々に作っているようであった。

Toadstool State Park

Toadstool State Park、名前の由来は、この一体の地形、もしくは、その形をした特異な岩の存在から「キノコ」。こんな形をした岩が確かにあった。ネブラスカのバッドランドともいわれているところで、まさしく、大地が侵食されて異様な形をした山々が延々と続いている。Crawford から少し北にゆき、そこから田舎道を突き進む。15 マイルの荒れた道路であったが、それだけ、自然のなかを走ることができた。舗装道路の脇では見られないアメリカの自然を満喫。時折、凍りついた水溜りを豪快に水しぶきを上げて突っ走る。強烈な衝撃を感じる。普段、舗装した道しか走っていない車には、少々鍛えるかもしれないが、これしきのガタガタ道で、がたが来るようでは、アメリカでは用をなさない。そんな道は帰ってのろのろ走るよりも、思い切り、スピードを落とさず走るほうが心地よい。とはいえ、ブレーキをかけると横滑りするような砂利道であるので、５０mile そこそこで走る。バックミラーから見る後ろの光景は、猛烈な砂埃である。アメリカの壮大さを知るには、こうした道路を走れるようにならなければいけない。こうして、やく１５分ほどの苦闘の末、目的のキャンプ地に付く。ここは、流石にここは、まるで、火山の火口近くにいる感度。こんなところにただ１人たたずんでいると、なにか火星にいるかのごとき雰囲気である。とにかく、アメリカには、こうした自然の造詣がいたるところにあるわけで、地球学者なら研究題材に事欠かないと思う。驚いたことに途中車を止めて、外に出ようとしたら、下の土に足がずぶずぶとはまってしまった。車では気がつかなかったが、見た目は硬い地盤のような道路が、実は、何センチも水をたっぷり吸い込んだ泥濘だったのだ。こんなところにうっかりはまってしまったら、それこそ、誰かに助けを求めなくてはいけない。ところが、ここは、まさしく、人里はなれた、しかも、ハイウェイまでは、１５マイル(24Km)もある。歩いてすぐに行ける距離ではない。そう思ったら、思わず、寒気に襲われた。早々に慎重に後ずさりをして退散を決め込んだ。帰りの途中、ドームロックという看板を見つけた。ここは、どこの案内にもなかったところで、見ると、遠くに独立した岩山が見える。１０マイル以上もあるということで、少し近くまで行って、写真に撮るだけで断念した。この State Park は、実は、Oglala という大草原を突っ切っていくのだ。大草原というだけあった、その広さは半端ではない。とにかく、見渡す限りの草原で、まさしく大海原が広がっているという感じ。今は、草は枯れて茶色の平原であるが、これが、いま暫くして春になり、緑の新芽を芽吹くころには、ここが、緑の海と化すのであろう。青い空と白い雲と、そして緑の大平原、想像しただけ

でもそのコントラストの素晴らしさが思い浮かんでくる。この大平原、やはりところどころが侵食されていて、ミニ渓谷を作っていた。曲がりなりにも、あのグランドキャニオンなどと同じ様な光景をつくりつつある。さしずめ、グランドキャニオンの赤ん坊といったところか。

あれ道から、舗装道路に戻ると本当に車の振動が少ない。走っている感覚がないと言っても過言でないくらい、その差が極端なのである。ここから、再び、Crawford に戻り、ハイウェイ２０号線に入ると、暫くして、Fort Robinson につく。この辺りの山の光景もまた素晴らしい。大きな岩山でできた壁がずっと続いている。その麓にあるこの砦は、1874 年に作られて、それから、70 年間にわたり、この辺り一体、西部の開拓の支援をしてきたとのことである。砦のなかには、いまは、家族のキャンプ用のキャビンとなっているが、もとは、沢山の兵士の宿舎、それに、下士官達の屯舎、司令官の建物など沢山立ち並んでいたところ。それらの建物は今でも残っており、その数の多さ、敷地の広さにびっくりである。後ろが岩山の崖に囲まれているということで、守るのにとても合理的な配置となっている。ここで活躍した、騎兵隊の歴史をはじめ、西部開拓の様々な記録を残すために、ここには、博物館が近接して二つもあった。残念ながら、この日は、ホリディーということで、博物館はどちらもやっていなかった。ここから、州境の街 Harrison までは、景観のよいドライブウェイとなっている。しばし、ここを走り、その風景を楽しんだ。

Fort Robinson

ここは、1874 年から 1945 年にかけて、アメリカ軍が駐留し、インディアンの居住していた地域を開拓する西洋人の保護を続けてきた前線基地である。伝説上の人物ともいえるような Crazy Horse、Walter Reed, Red Cloud , Arthur MacArthur, Dull Knite , General Crook and Doc Middleton など、今でもアメリカ人に好かれている人たちの活躍した場所である。軍が駐在していたころは、さまざまな訓練をしているものと思われる。いまでは、そうした、訓練の場所が観光地化されていて、沢山の家族が当時の宿舎を利用して、長期のバケーションをここで楽しんでいるとのことである。後ろにそそり立つ崖を控えたこの砦は、昔の砦と違って整然としており、むしろ、小奇麗さが売り物のような感じ。

こうして、前回、この Crawford に来たときには、雨が降っていて回りの景色を楽しむド頃ではなかったが、今回は、存分のこの地の名所をたっぷり時間をかけて楽しむ事ができたので、ますます、ネブラスカの自然に親しみを持つことができた。満足、満足の気持ちで、Chardon に向かう。この街には、カレッジもあり、そのなかに沢山の博物館などもあったようであるが、この日は、土曜日ですべてお休み。予定していた、Fur Trade Museumm 冬は休館ということで、結局、一つも立ち寄られなかったのはまことに残念としか言いようがない。

というわけで、Chardon で時間があまったので、地図を開き、Niobrara 川の辺の草原ドライブに出かける。ところが、ハイウェイから少し、わき道に入ると人の住んでいるのは、本当にすくない。そんな中にある自然は、とてつもなく、壮大で、人の手がはいっていない、まことに素直、そのものの自然という感じだ。僅か、数 mile 程度であるが、農村の広がる草原に入る。ハイウェイでは、横に、動物の飛び出し防止ようの柵があったり、あるいは、電力を送信する電柱などが建っていて、人間臭さがすこし残っている感じであるが、この田舎に入ると、そんなものはなく、とにかく、いきなり大草原だ。路肩から車輪を踏み外したら、普通の乗用車では脱出できそうもない。脱輪だけに気をつけて、周りの景色を存分に楽しむ。とにかく、360 度、見渡す限り、私 1 人。時たま、こんなところで、どんな生活をしているのかと同情したくなるような人里離れたところに、農家がポツンと一塊になっている。勿論、何家族もがそこに住んでいるのではなく、たった一家族か、まあ、せいぜい、その兄弟家族くらいで細々と生活しているのであろう。ことあれば、まことに心細い限りであるが、これが、アメリカの現実であろうし、それに耐えて彼らは生活をしているのである。

道路整備車が道を譲ってくれた。
それほど田舎であるから、道路の状況は決してよくない。砂利を敷き詰

めて車は走れるがわだちはあるし、道路の脇は深い堀を越えてあとは延々とした牧場が続いている。ところが、そんな道路でもここをきちんと整備しているのである。ふと、注意をしてみたら、自分のかなり前にもうもうと砂煙を立ち上げてゆっくりゆっくり走っている車がいる。その先には屋根にランプを点灯している車が走っている。まさか、この田舎道でスピード違反もないだろうと思いつつ、近づいてみたら、なんとこれが、道路整備車。丁度、道路に水撒きをするような形の車が道路の砂利を均しているのである。こちらは知らない道でもあるし、この車のあと、砂煙を浴びて、何十分も走るのでは叶わないなというかの様に、中央分離帯のない道路で追い越しのしぐさをしたら、なんと、心得たもので、直ぐに合図のウィンカーをだして、道をあけてくれた。日本では、道路整備車などは、整備してあげているのだから、おとなしく後について来いなどという態度がありありののろのろ運転で作業をしていることが多いが、こちらは、流石にそんな意地悪な根性はない。生活のための車が優先なのである。こうしたことで、気分よくドライブができるのも、アメリカ気質のおかげかも知れない。

突然あらわれた農家の庭で ATV に乗っている若者が。

いよいよ、田舎道、標識もなく、走っている方向もだんだん心細くなり、暗くならないうちにハイウェイに出たいとおもい、方角の検討をつけて、何度も交差点を超える。と、どこからか農家が見えてきた。農家があるといっても、たったの一軒家であるから、これで直ぐにはハイウェイということではないが、人が見えただけでもなにか安心する。そんな農家の庭で、ATV(All Terrain Vehicle)を乗り回しているおにいちゃんが愛想良く手を振ってくれたが、こちらにはそれに答える心のゆとりがない。この ATV というのは、いまアメリカで大流行の車。どんな地形でも乗り回せるというもので、日本では、バギー車などと呼ばれている。アメリカの大自然のなかを走るのは、勿論、車が一番であるが、車の入れないようなところでは、昔は馬を使っていたのだろうが、最近では、その馬代わりのこの ATV 車に乗る。馬を飼育するよりも手っ取り早いのであろう。馬なら勿論、どんな地形のところでも行けるし、また、馬を飼うというのは、人と馬とのかかわりを楽しむということもあろうが、何エーカーもの土地が必要になるし、また、移動にも、馬を連れて行かなくてはいけない。その点、この ATV 車は、ガレージも要らないし、ガソリンがあればどこでも走る事ができる。スピードもそこそこでるし、また、いろいろな装備もつけることができるので、まさしく馬代わりの車といえよう。アメリカ

市場では、ホンダをはじめ、カワサキ、スズキなどのオートバイメーカーがこぞってこの車を作っている。そのシートを製造している当社も、おかげで大繁盛というところ。

三日目

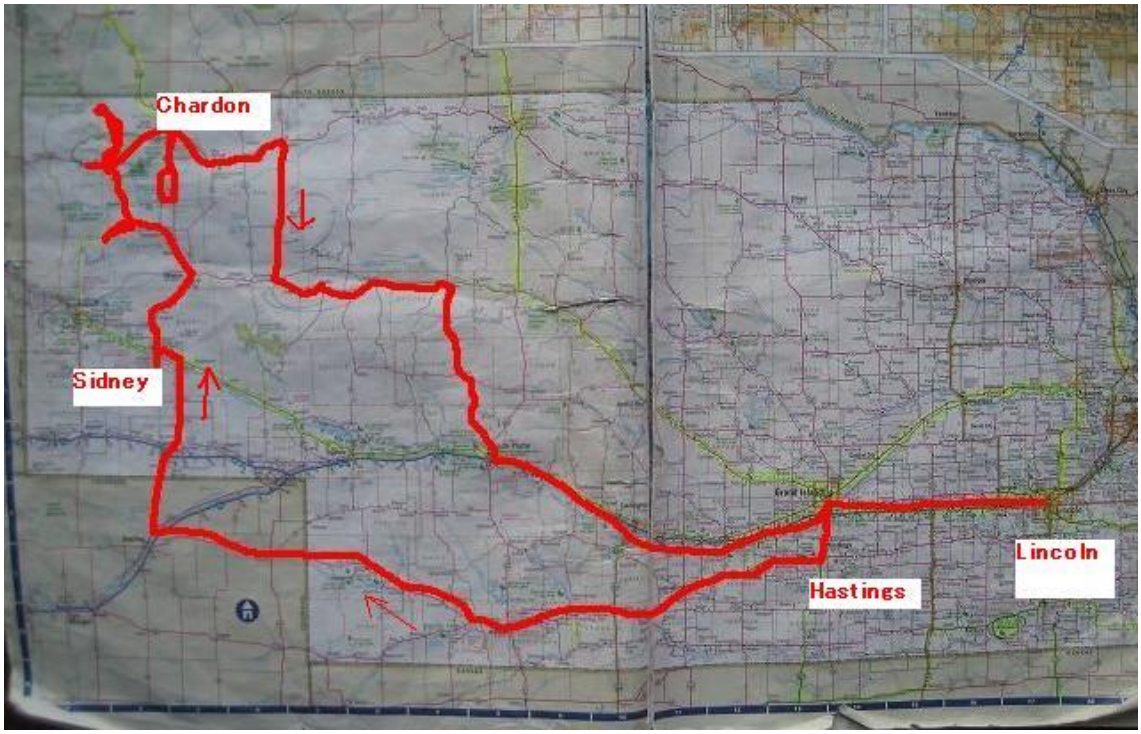
Chardon は、ネブラスカの北西の町、少し来たに走ればもうサウスダコタだ。この街を 20 号線が東西に走っているが、この道路、両サイドが見事な田園で、まさに壮大なアメリカの自然を楽しみながらドライブをすることができる。ネブラスカは、中央をプラッテ川がながれ、その川沿いに i-80 が走っていて、ここがかってのオレゴントレイル、モルモントレイルの名残である。その北側には、広大なサンドヒルが広がっている。しかし、そのところどころには、ミズーリ川に流れ込む小さな支流がいくつか東に向かって流れている。その渓谷と砂山を利用して、この一体が大牧場地帯になっているわけである。20 号線を

Hay Springs , Rushville ,Clinton,そして、Gordon の街まで走り、そこから、27 号線を南に向かい、一揆にサンドヒルを走りぬける予定だ。Gordon ネブラスカハイウェイの 2 号線にある Ellsworth の町まで、その距離 55mile は、殆ど人家のない、サンドヒルのなかのハイウェイである。丁度、その中間辺りに、Mari Sandoz State Memorial Maker というところがあるので、ここに立ち寄るのを楽しみに、青空と、白雲、そして、やや緑の草原には少し早い黄色の草原の中をひたすら飛ばす。そして、Mari Sandoz の Maker のところに来ると、ここに Museum と書いた看板があった。但し、その下には、牧場の名前があり、ここから 6 マイルと出ている。道路の状態は決してよくない。しかも、人の居る気配は勿論ない。この大平原に居るのは私 1 人である。このことを十二分に自覚し、自重しながらも、ここまできて、この Museum を見ないわけには行かないと、またしても、もうもうと砂煙をたてて、この Ranch に向かう。ゆっくり走っていると、道の凸凹がそのまま伝わってくる。ここは、少々荒いが、スピードは落とさず、40mile くらいの方が、スムーズに走れる。暫く走ると、周りには小高い丘が連なり、いよいよサンド

ヒルの感じである。延々と大海原のように続く丘である。道を踏み外すと、砂でスリップすることは間違いない。四輪駆動ではないので、はまり込んだら、これで一環の終り。片手でビデオをまわしながら、片手でハンドルを握り慎重に、しかも、大胆に、一つ丘を越え、二つ砂山を越えるという調子。ところが、何マイル走っても、その Museum らしきものが出てこないのである。丘を越えて出てくるのは、鏡のように静かな池を幾つも抱え、延々と広がった平原だ。行けども行けども、見ることのできるのは、この砂山と大平原だけ。ということは、ひょっとして、この広々とした大平原が、Museum ということなのかもしれない。となれば、この Museum の大きさは、数 mile もあるということになる。まさしく、アメリカ一の広さをもつ Museum w ではないか。さすが、アメリカ。

2 号ハイウェイのこのあたり、両側の景色は、サンドヒルだけ。そのほかには何もない。ここは、ネブラスカというより、ワイオミングやモンタナの景色に似ている。とても素敵な感じのするドライブウェイであった。そして、そのすぐ脇に大陸横断鉄道がはしっていて、例により、石炭を満載した貨物列車が、これまた、延々と連なって走っているのである。そんな鉄道の軌道をチェックしているトラックが線路の上を走っていた。丁度、暫く私と併走したので、うまく写真に納めることができた。こちらもスピードを落とし、60mile くらいで暫く走り、手を振ってみたが、仕事に熱心だったためかこれには応えてくれなかった。残念。

Mullen と言う街で、2 号線とわかれ、再び、97 号線で、サンドヒルのなかを突っ走る。North Platte まで、まだ、60mile くらいがサンドヒルである。この間、途中に T ryon という小さな町があるだけ。ここに、この広い大地に本当に住んでいる人が少ないのである。まだ、まだ、アメリカには余分な大地が有り余るほど残っているのである。そんな印象を強くして、このあと、インターステーツを 80 マイルで飛ばして、気分よく、ドライブを終了した。



今回のドライブコース。地図の白い部分がネブラスカ州です。

第一日目

Lincoln　～　Sidney　まで　443miles

Sidney　～　Chardon　まで　392miles

Chardon　～　Lincoln　まで　510miles

合計　1345 miles